

四季の美しい我が国の気候模様が、近年では徐々に亜熱帯化しているとのこと。『梅雨明け』『爽快』『小暑』などの夏を表す言葉を使うのにも何となく、ためらいがあります。先人たちが使ってきた美しい季語も少しずつ、別の言葉に様変わりするのだと思います。『ゲリラ豪雨』『鬼雨』という日本古来の言い方にしてみると、怖ろしさの中にも民話的な響きがあります。『鬼雨』ぜひ使ってみてくださいね。

読書感想文コンクール課題図書

『銀河の図書室』 名取佐和子 著



県立野亜高校の図書室で活動する「イーハトー部」は、宮沢賢治を研究する弱小同好会だ。部長だった風見先輩は、なぜ突然学校から消えてしまったのか。高校生たちは、賢治が残した言葉や詩、そして未完の傑作『銀河鉄道の夜』をひもときながら、先輩の謎を追い、やがてそれぞれの「ほんとう」と直面する。今を生きる高校生たちの青春と、宮沢賢治の言葉が深く共鳴する感動長編。

『夜の日記』 ヴィーラ・ヒラナンダニ 著



1947年、インドはイギリスからの独立とともに、パキスタンと分離しふたつに分かれてしまう。ちがう宗教を信じる者たちが、互いを憎みあい、傷つけあっていく中、ニーシャーとその家族は安全を求めて、長い旅に出た。自分の思いをことばにできない少女が亡き母にあてて、揺れる心を日記につづった一冊。

『「コーダ」のぼくが見る世界：聴こえない親のもとに生まれて』 五十嵐 大 著



ときに手話を母語とし、ときにヤングケアラーとみなされて、コーダは、ろう者とも聴者とも違うアイデンティティをもち、複雑な心を抱えて揺れ動く。作家である著者が、幼少期の葛藤や自身のなかにある偏見と向き合いながら、コーダの目で見た世界を綴る。映画「ぼくが生きてる、ふたつの世界」原作者のエッセイ集。

ホラー特集



『近畿地方のある場所について』 背筋著
とある地域にまつわる数々の言説を丹念に紡ぎ、事実とフィクションの境界を曖昧にすることで、不気味なりアリティを生み出している。今流行りのホラー小説を読みたい！という初心者の方にオススメ。



『右園死児報告』 真島文吉著
明治二十五年から続く政府、軍、捜査機関、探偵、一般人による非公式調査報告体系。右園死児という名の人物あるいは動物、無機物が規格外の現象の発端となることから、その原理の解明と対策を目的に発足した…。事前情報一切なしで読むのがオススメ。



『をんごく』 北沢 陶著
大正時代末期、画家の壮一郎は、妻・倭子の死を受け入れられずにいた。未練から巫女に降霊を頼んだが、「普通の霊とは違う」と警告を受け、顔の存在しない「マキエリ」と出会う。ホラー要素と文学的美しさを同時に楽しみたい方にオススメ。

夏休み貸出について

7月7日(月) から9月1日(月) の期間は、**一人5冊**まで長期貸出できます。
この機会に長編作品や作家の一气読みなど、それぞれの楽しみ方で多くの本を読んでください。
※借りた本の管理については、いつも以上に丁寧に取り扱ってください！

先生のお薦め本から

先生のお薦め本コーナーに、今年度着任された先生方のお勧めが加わりました。ぜひ、コーナーをチェックしてくださいね。今回ご紹介する二冊は読書好きの鈴木裕美子先生と久保田大二朗先生のお薦め本です。生徒の皆さんに寄り添った読みやすい内容の心に残る本を選んでくださいました。お薦め本を読むと、先生方との距離がぐっと近くなるのではないのでしょうか？

久保田大二朗先生 お薦め 『スポーツノンフィクション傑作集』 山際淳司著

多くのスポーツの物語の傑作集です。すべてがハッピーエンドではなく現実世界ならではの辛い結末をむかえることもあります。そんなアスリートが見せる一瞬の輝きをとらえた一つ一つの話に惹かれるはず。お薦めの話は何でもない普通の高校が甲子園出場を果たすまでを追った「スローカーブをもう一球」と、普通の大学生がボートでオリンピックを目指す「たった一人のオリンピック」現実だけでも面白い！この話だけでも読む価値アリ。



鈴木裕美子先生 お薦め 『透明な夜の香り』 千早茜著



香りと記憶は強く強く結びついています。懐かしい香り、涙を流した日の香り、今まですっかり忘れていたのに鮮やかに記憶が蘇ってきた経験、誰にでも一度はあると思います。嗅覚でしか感じられないはずの世界が文章で美しく再現されている、自分の大切な香りを探したくなる物語です。

第一回図書館イベント

今年度もサッカー部の皆さんが図書館イベントに協力してくれました。3年生全員で萩原朔太郎の『竹』の群読を行いました。この詩は、竹を表す言葉・リフレイン・リズムがとても美しく、詩の内容も含めて聴いている皆さんの印象に残りました。サッカー部の皆さんは、昨年度県ベスト16まで勝ち抜いたメンバーです。堂々と群読を披露してくれた姿に参加者はとても感動していました。



僕たち3年生は何でも言い合える信頼関係が成り立っていることで、チームの強みを増している学年です。今回の群読でも、いつものように遠慮したり緊張することなく、大きな声を出し言葉を連ねることができました。決して上手くはなかったかもしれませんが、聞いてくださった皆さんに何かを伝えられていたら嬉しいです。主将 伊藤龍生君

萩原朔太郎：群馬県前橋市生まれの詩人。口語体の自由詩にとぎすまされた感覚的表現をもちこんで、新しい詩風を確立した。代表作に詩集『月に吠える』『青猫』短編小説『猫町』など。

授業利用の光景 国語より

稲垣宣泰先生の授業で図書館学習が行われました。言語コミュニケーションについて、稲垣先生からの講義を受けた後に『伝える力』について意見を交わしました。各グループごとに語彙力や文法の知識についての重要性をラフなディベートで認識して、実際に様々な状況・境遇・場面・位置をシミュレーションできる教材で楽しみながら実践していました。言語コミュニケーションに関連する本に興味を持って、貸出もたくさん行われました。



近年、ベストセラーになった『ホモサピエンス全史』には、人類の進化は「認知革命」が起きたからと記されています。ホモサピエンスはフィクションを共有することで、ネアンデルタールなど他のホモ属が絶滅する中、こうして生き残っています。現代ではフィクションが科学によって虚構や妄想となってしまう側面がありますが、伝える力は私たちを伸ばす手立てとなって、様々な形で残っています。その中でも『言語コミュニケーション』を取得し続けることの大切さを感じる授業内容でした。